

英語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3 2/4 2/5 共通仕様	第1問	空所補充問題(文法・語法, 熟語)	やや易
	第2問	整序英作文問題(文法・語法, 熟語)	標準
	第3問	対話文完成問題	標準
	第4問	会話文および広告読解問題	標準
	第5問	長文読解問題	標準
	第6問	長文読解問題	標準

●出題形式

椋山女学園大学の入試では、3日程より試験日を選ぶことができるうえ、最大3日程すべて受験可能で、すべてマークシート方式である。2教科型入試の場合、出願する学科によって選択が必須の科目もあるが、概ね任意の2科目を選択して受験する形式をとり、試験時間は2科目併せて連続した120分となっている。したがって、60分程度が解答時間の目安となる。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ(リスニングを課さない)

b. 出題内容(大問構成)

文法・語法空所補充問題1題、整序英作文問題1題、短めの対話文完成問題1題、長めの会話文読解問題と広告読解問題によって構成された大問が1題、長文読解問題2題の計6題(小問数は40問に統一)

●問題の傾向

第1問は、単文中の空所に適切な語句を補充する形式である。時制など文法の基本分野から、分詞構文や仮定法などの高等学校で履修する文法分野や語法まで、幅広い分野から出題されており、履修範囲における漏れがないことが必須である。第2問は整序英作文問題で、5つの選択肢を適切な語順に並べかえる形式である。日本語訳が与えられていないため、日本語訳が付されたものに比べるとやや難しいが、文意だけでなく文法の知識を活用して丁寧に解答を進めれば、正解も難しくないだろう。第3問は、2人による1~1.5往復の会話内に設けられた空所を補う形式である。発話の意図や対話の文脈把握を丁寧に進めて理解することが求められており、会話文特有の受け答えばかりを頼りにしても、理解につながらない。与えられた対話すべてを丁寧に読み解き、対話の状況に合う「最も適切な」発話を選ぶように努めよう。第4問では、長めの会話文読解問題と、英語で書かれた広告などを題材とした問題の2つの形式が出題されている。会話文読解問題は、概ね空所への適語(句)補充、下線部の適意選択、内容に関する発問を主軸に構成されている。それぞれの問題で与えられている選択肢はさほど難しくなく、適語(句)補充問題や下線部の適意選択問題で確実に正解するためには、設問部前後をやや広めに読解して会話の流れを理解しておく必要がある。広告読解問題は、内容に関する発問が中心であるが、日程によっては、読解量の多い図表が与えられている問題や、広告の内容に沿わない情報を指摘する問題がある。先に選択肢に目を通して問われる情報に目星をつけておき、それぞれに該当する広告内の情報一つひとつを確認する必要がある。解答にはある程度の時間を要する。第5・6問は、入試標準レベルの単語・熟語や表現を用いた長文読解問題である。空所補充問題、下線部の意味を問う問題、内容に関する発問、タイトル選択問題などを用いて、文章の読解力と理解度を測っている。なお、文章量はそれほど多くないが2つの文章を読解せねばならず、それ相応の読解速度が求められている。また、語注も付されていないため、教科書レベルよりも一段階上の単語・熟語力を持っていることも求められている。

●難易度

総じて、大学入学共通テストと同等の難易度である。

英語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

全体的な難易度は概ね標準であり、高校3年間で学習する基本事項(教科書レベル)を完璧に習得し、ある程度の入試問題演習を経ていることが求められている。つまり、試験時間を60分と想定した場合、読むべき英語の量と問題数を考慮し、基本的な学力を確実にしたうえで、効率よく解答する訓練をしっかりと積んでおくことが必要である。

●高等学校で学習したことの漏れを無くしておこう

問題すべてにおいて、高等学校での学習を完璧に習得していることが最低限求められている。第1・2問では、教科書レベルの出題が主であるため、とにかく全問正解を目指したい。英語が得意な受験生であっても、慢心することなく、まずは基礎・基本の徹底した復習から始めてほしい。入試標準レベルの演習が今できていようとも、各大問とも、どの問題でも基礎・基本における取りこぼしがあれば誤答を招くよう綿密に作問されているので、「どうして間違ってしまったのか」だけでなく、「正解はしたが、丁寧かつ正確な思考・判断で正解できたのか」という観点でも自身の演習を振り返るくらいの丁寧さで、教科書レベルからの復習を重ねたい。

●単語・熟語は、意味だけでなく、表現自体も一緒に覚えるなど、+αの工夫をしよう

広告などを用いた第4問や語注の付されていない第5・6問では、教科書には登場しないであろう語(句)が使われていることもある。入試上級レベルの単語・熟語を習得してもよいが、そのためにはかなりの時間や労力を要するし、それらの語句の意味を知らずとも、前後の内容や文脈から推測することができるよう丁寧に作問されているため、入試標準レベルの単語を徹底的に習得しておくことがよい。言い換えれば、単語や熟語の意味だけでなく、使われる例文や文型、共に用いられる前置詞・副詞などの情報も一緒に覚える、ということだ。第4問以降で大いに活用できるだけでなく、それまでの大問でもその知識が遺憾なく発揮されるからだ。

●演習だけに時間を費やすのではなく、生の英語表現にも日々触れる受験生生活を送ろう

すべての問題において、難しい文法事項や難解な読解・解釈を課しているわけではなく、高等学校で学習する基礎・基本を土台として、「生きた英語」へと転化させる力を求めている。つまり、難しい構文や難度の高い単語・熟語の知識があるかどうかを問うているのではなく、「生きた英語」の中で、今まで学んできた英語の基礎・基本がどのように使われているかを理解していることを問うている、と言える。先にも述べた通り、試験時間に対する読解量が多いため、それ相応の読解・演習量が必要であるが、その演習の4分の1でもいいから、「生きた英語」に触れつつ、それらを教材として、その中で「自らが学んできたことがいかに応用されているか」を探る学習も行っておきたい。教材としては、英会話入門程度のテキストと音声素材や、英語を第2言語とする視聴者を対象とした海外のメディアが提供する学習サイトなどを活用するとよい。特に、第2問や第3問の会話文などでみられるような、平易な表現であっても「こんな使い方があったのか」などの新しい発見が多い。日本語訳をして理解する習慣を少なくする訓練になるだけでなく、その発見がそのままこの入試で出題されている観点にあたるのだ。

●過年度の問題を数年分解き、自分なりの分析と戦略を作っておこう

これまで述べたように、「既習の基礎・基本を土台とした使える英語の理解や習得」が出題の土台となっているため、基礎・基本は徹底して身につけてもらいたいことは言うまでもない。しかし、基礎・基本を応用するということは、個々によって、対策に力を入れるべきその派生分野は多岐に渡って異なる、と言える。既習事項を徹底した後は、過年度の問題を数年分解き、自分の得意な大問・問題と苦手な大問・問題に分け、自分にとって「どのような観点の問題が得意・苦手なのか」を分析しよう。例えば、第1問において、選ぶべき前置詞が曖昧であれば、教科書レベルの単語・熟語や語法の徹底した習得が未完であると言える。その他、第3問や第4問の会話文において、確かな根拠をもって空所を埋めるべき表現を選べない場合には、「生きた英語」に触れる機会が足りない、と言えるし、第5・6問において、文章を読み下す時間が足りない場合には、日常において英語の文章を読みこなす量が足りない、と言える。自分の得手・不得手を分析し、それらに応じた対策をすることが大切である。